

Title	モダリティ動詞 aller
Sub Title	Aller, verbe modal
Author	川口, 順二(Kawaguchi, Junji)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2006
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.91, No.3 (2006. 12) ,p.310(19)- 328(1)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	鷺見洋一教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00910003-0328

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

モダリティ動詞 *aller*

川口 順二

0. はじめに

語彙の意味記述を試みると必然的に多義の問題にぶつかる¹。特に文法的用法を発達させた語彙項目は多岐に亘る用法をどう整理して諸用法をどのように結びつけるのが問題になる。近年ではメタファ、メトニミ、そして文法化などが多義の説明原理として様々な語彙項目に適用された。本稿で取り上げる動詞 *aller* についてもその線に沿っての説明が試みられてきている。本稿ではモダリティに重点を置いて *aller* の素描を試みたい。

まず第1節で *aller* の諸用法を伝統的な分類に則ってリストアップする。次に第2節で Damourette et Pichon (以下 D&P と略す) の説を中心に *aller* の諸用法の成立過程の説明を考察して、メタファの果たす役割を見る。第3節では仮説を提示し、主な用法を説明する。

1. *Aller* の用法リスト

1. 1. 「移動」

1. 1. 1. 「空間移動」 (+目的地の表現)

辞書類や文法書では動詞 *aller* のもっとも基本的な意味として記載されるものである。日本語では「行く」が対応する。

- (1) Je suis vite allé à l'hospice en espérant pouvoir travailler un peu. (H. Mingarelli, *La dernière neige*)

1. 1. 2. 「目的を伴う空間移動」 (+不定法)

前置詞を介さずに直接に不定法を伴う構文で、「～しに行く」と訳される。ここでは目的地が表現されないこともある。次の例では「電球を買う」が移動の目的として表わされているが、それがどこなのかは言われていない。日本語でもどこに行っていたのかを聞かれて「電球を買いに行っていた」と答えられるのと同様である。

(2) Avant de passer rue de Brescia, je suis allé acheter une ampoule en verre dépoli. (H. Mingarelli, *La dernière neige*)

1. 1. 3. 「空間移動の様態」

移動表現では一般に目的地である場所や方向の表現が伴うが、どのように移動するのかという様態だけが表現されることもある。

(3) Je ne sais pas si j'ai ralenti, ou si la chienne est allée plus vite soudain, toujours est-il qu'elle est apparue à côté de moi. (H. Mingarelli, *La dernière neige*)

Aller bon train は「速く移動する」ことで、次のように用いられる。

(4) Le tilbury allait bon train, mais le boulevard était encombré de voitures, et souvent il était forcé de ralentir sa marche (P.-A. Ponson du Terrail, *Rocambole*, cité dans *TLF s.v. aller*)

これが比喩的に用いられると次のようになる。

(5) [...] la disgrâce de Thiouin ne faisait plus de doute pour personne à Autun : son absence lors des procès, les accusations graves qui avaient été portées contre Aldric, Bodert et bien d'autres l'atteignant directement, l'attitude de son entourage, son accablement visible, tout confirmait une mise en cause et les langues allaient bon train. (M. Paillet, *Le poignard et le poison*)

1. 2. 「価値評価」

フランス語特有の表現 gallicisme として話し言葉で ça va が「順調だ」を意味するとされるが、一般に良い悪いの評価の表現を伴って、「順調だ」、「うまく行く (行っている)」、「(人について) 健康だ」などを表わす。辞書類では学習者のために人についての「健康だ」の意味を別立てにするが、

aller の意味を考える上ではその必要はない。次の例は否定文で「順調ではない、良くない」ことを表わす。

- (6) Alors voilà, me dit-il, j'aime beaucoup votre texte, on peut le publier comme ça si vous voulez. Mais je me demande si la fin, vous ne croyez pas que la fin, il y a quelque chose avec la fin qui, je ne dis pas que ça ne va pas, mais quand même, cette fin, etc. (J. Echenoz, *Jérôme Lindon*)

間接目的（与格）を伴って「～にとって（良い・悪い）」を示す用法もここに分類される。

- (7) « Saucisson à l'ail. Oeufs durs. Choucroute. Je vais la faire réchauffer à la cuisine. Ca t'ira ? (P. Véry, *Signé : Alouette*)

1. 3. 文法的用法（＋不定法，＋現在分詞）

ここまでは「空間移動」と「評価」という2つの用法を見てきた。1. 3. で扱うのは空間移動が介入しない用法で、不定法または現在分詞と共に用いられてアスペクトやモダリティを表わすものである。

1. 3. 1. aller + infinitif（以下 aller + inf. と略す）

文法研究では後述の aller + 現在分詞と平行して aller + inf. の「近接未来」を表わす用法が典型的な文法化と見なされよう。しかしながら、一般の文法書に記載のある「近接未来」のほかにもいくつかの用法が指摘されていて、しかもそれらが峻別することのできない融合状態を示す例も多いのである。なお、1. 3. 1. 1. から1. 3. 1. 6. までは動詞 aller の時制に制限がある。すなわち aller は直説法現在と同半過去の2つの時制でしか現れることができないのであり、これが他の用法との区別に役立つ。

1. 3. 1. 1. 「近接未来」

「近接未来」という伝統的名称を踏襲するが、この用法は近い未来を表わすものではない。既に多くの研究者たちが指摘しているように、aller + inf. は何世紀後のことでも何億年後のことでも表現できるのである。Larrea(2005 : 338)の引く

- (8) Il y a une galaxie qui va entrer en collision avec la nôtre dans pas tout à fait

trois milliards d'années. (France Inter, 6 mars 2002)

は数多い例の1つである。近接未来は発話時において必然的に予測される出来事を時間軸上の現在より後に位置づける用法であるという考え方は研究者たちの間で一般である。

またテンス用法とアスペクト用法の区別をすることがある。例えば朝倉(2002)は助動詞としての *aller* の説明において、「～しよう」というテンス用法(近接未来)と、「～しようとしている」、すなわち「まさにある動作を行なおうとしている状態を表わす」アスペクト用法とを立てている。この区別は *aller* + *inf.* をあくまで時間との関係で説明しようとするものであるが、本稿ではモーダルな用法にまで調査を広げているので、この区別をそのまま踏襲することはしない。本稿の記述を通して明らかにしたい点の1つはまさに *aller* を時間的にのみ捉えようとすると語彙項目としての *aller* の全体像が見えにくくなってしまうということなのである。

ところで近接未来の用例は事欠かないが、不定法が目的を示す1. 1. 2. で示した用法との区別が困難な例も多い。例えば次の例(9)のように空間移動の解釈の余地の全くない例では問題ないが、(10)になるともはやいずれに分類べきなのかを決めることは出来ない。

(9) C'est-à-dire, lui dis-je, que je n'ai pas ma voiture en ce moment, elle est chez le garagiste. Et alors ? s'étonne-t-il. Je vais être obligé de venir en métro, lui répons-je. Je ne vois pas le rapport, dit-il. (J. Echenoz, *Jérôme Lindon*)

(10) « Saucisson à l'ail. Œufs durs. Choucroute. Je vais la faire réchauffer à la cuisine. (P. Véry, Signé : Alouette :106)

実際、à la cuisine は *aller* を移動動詞と解釈すればザウアクラウトを温めるために目的地である「台所に行く」となるし、これを近接未来用法と取れば *la faire réchauffer* 「(ザウアクラウトを) 温める」の場所補語であり「台所で温める」となる。

1. 3. 1. 2. 「非現実」

主節内で *aller* を半過去におくと、「～するところだった (が、実際にはしなかった)」という非現実の解釈が可能になる。

- (11) --Il y a un milan qui allait crever de froid si je ne l'achetais pas. (H. Mingarelli, *La dernière neige*)

これは一般に半過去の持つ意味効果が *aller + inf.*にも現れることを示す。現在形でも同じことが観察されるが、非現実の解釈が生じるためには *aller + inf.*に置かれた出来事・状況が実際には起こらなかったことを示す必要があり、従って *aller* の現在形は物語やト書に現れる語りの現在でしかありえない。朝倉(2002:40)は次の

- (12) Ils vont fuir ensemble, quand survient Mme Armaury 「彼らがいっしょに逃げようとするところにA夫人が突然姿を現わす」(話の筋書)

を出して、これを *aller + inf.*のアスペクト的用法に分類し、「時況節の中、または時況節を伴い、ト書・物語体の現在形と用いられる」とコメントしている。そして主節に *aller + inf.*が半過去で現れるときは「…しようとしていた」の意味が多いとして次の2例を出しているが、このうち(14)が非現実に当たる(: *ibid.*):

- (13) Il allait être neuf heures.

- (14) Nous allions sortir lorsque mon frère et Roussy arrivèrent.

ここで重要なことは、仮定の意味効果が現れる条件として *aller + inf.*の出来事が生起しなかったことを明示する表現が要求されることで、従って語りのジャンルに典型的に現れるということである。

Gosselin(1999:48)は次の

- (15a) (J'avais dit que) si je gagnait au loto, j'allais acheter une voiture

のように <Si P, Q> 型の仮定文で Q が *aller + inf.*の半過去の場合、これは *aller + inf.*と未来形との差異をのぞけば

- (15b) Si je gagne au loto, j'achèterai une voiture

と同様の可能の意味であり、それに対して

- (15c) Si je gagnais au loto, j'achèterais une voiture

には対応しないと述べている。つまりここで非現実と呼んだ意味効果は潜在的可能性 *potentiel* が実現しなかったことが談話内で明示されたことから生まれるのであって、(15c)のような反実仮想としての非現実とは異なるこ

とになる。

朝倉(ibid.)は(13)-(14)に対応する現在形については「時況節・関係節の中で習慣的または超時間的事実を表す」と述べており、「超時間的事実」として(16)の例をだしている。

- (16) Un homme qui **va** vraiment s'arrêter devant une porte freine depuis quelques minutes. 「ある家の前で本当に立ちどまろうとする者は何分か前から歩みを遅くするものだ」

1. 3. 1. 3. 「推測」

未来形にもあり、*aller + inf*構文ではまれな用法として Larrea(2005)は次の例を挙げている。

- (17) Il **va** encore avoir oublié de donner à manger au chien. (France Inter, 8/3/01, cité dans Larrea(2005))

1. 3. 1. 4. 「婉曲」

最近流行っている新しい表現を集めた Viala(2006)は次のような指摘をしている。

- (18) **on va dire** : expression servant à ne pas assumer totalement la responsabilité de ce qui va suivre. S'exprimait jadis par : « Je dirais volontiers si j'osais »
実際ネット上の書き込みなどでは高い頻度で見受けられる。

- (19) (Gilles Gouget が Yves Bommenel に行なったインタビュー)

G.G. : Par l'écrit... puis par la musique aussi ?

Y.B. : La musique, c'est « la grande libération » **on va dire**, puisque finalement, ça nous a appris à... à exister finalement, c'est ce qui a birsé les carcans de la France Pompidolienne, quoi. (http://www.divergence-fm.org/article.php3?id_article=89)

1. 3. 1. 5. 「命令・依頼」

未来形にも並行する用法がみられるもので、次のような例がある。

- (20) --Non, regarde-moi, dit-elle. Tu **vas aller** dans ta chambre. [...]

--Tu veux vraiment que j'**aille** dans ma chambre ? (R. Grenier, *L'exorcisme*)

1. 3. 1. 6. 「特徴的ふるまい」

次の例で *aller + inf.* は Bush の性格からして当然してもおかしくないが、いささか意外であるような行為を Bush が行なったことを言っている。

- (21) Il [= George Bush] dit tout et n'importe quoi. Un jour, il dit qu'il faut faire la guerre parce que Saddam Hussein a des armes de destruction massive, un jour il dit que Saddam Hussein soutient le terrorisme international, et un autre jour il va expliquer qu'il faut installer en Irak un régime démocratique qui sera un modèle pour tout le Moyen-Orient. (France Inter, 12/3/03, cité dans Larreya(2005))

D&P は動詞で表現される出来事が「不規則的に、予期できずにあたかも気まぐれに何度も起こる」ことを表わすと述べた。Larreya(2005)もこの用法が今日では非常に頻度が高いとして、既に知られた一連の出来事から演繹される典型的な出来事に言及するが、しかしそのような出来事の起こる原因そのものについては明示しない用法だと述べている。

1. 3. 1. 7. 「語りの *aller*」

- (22) Je suis en train de faire des courses avec Florence quand mon téléphone sonne dans ma poche. C'est Irène qui m'annonce que Jérôme est mort lundi, et enterré ce matin même. Les heures qui suivent, je n'ai pas envie d'en parler. Et puis, l'après-midi, je vais marcher seul sur une toute petite route de Normandie. Je marche, vraiment longtemps, beaucoup plus longtemps que ce dont je suis ordinairement capable, mais aussi beaucoup plus lentement que Jérôme, en me rappelant par le détail tout ce que je viens d'essayer de raconter à son propos et d'autres choses encore. (J. Echenoz, *Jérôme Lindon*)

この例が示すように、語りの用法では語りの現在が用いられる中に現れることが多い。もし語りの現在を過去形に置かならば *aller + inf.* は不定法の動詞が過去形 (cf. *marchai*) に置かれることになる²。D&P は古オック語とカタロニア語で多用されたこの過去の出来事を指す用法がフランス語では 14 世紀から 16 世紀にかけて観察されることを述べたが、Larreya は近年頻繁に見出せると指摘している。また D&P は次に見る「異常な行

為」を述べる用法や先にみた「特徴的ふるまい」を指す用法と同様にここでも意外性があると言っているが、Larrea はこの用法がごく頻繁になったこと、そのために意外性が感じられないような用例も多いことを指摘している。

1. 3. 1. 8. 「異常な行為」

D&P が *allure extraordinaire* と名づけた用法で、「予期に反する迷惑・邪魔」という意味合いを不定法の動詞の示す行為に付与すると述べている (D&P: 107).

(23) Oui, une voiture toute neuve. Et ce connard est allé m'emboutir une aile !
(Larrea(2005): 351)

(24) --Qu'en pensaient tes camarades, comment expliquaient-ils la fureur du vicomte ?

--Allez chercher pourquoi un seigneur se met en colère... (M. Paillet, *Le poignard et le poison*)

1. 3. 1. 1. ~ 1. 3. 1. 7. で見てきた用法は現在形と半過去形が用いられるものだが、この異常な行為を語る用法では時制の制限は全くない。

「婉曲」, 「特徴的ふるまい」, 「語りの *aller*」, 「異常な行為」の4つの用法については文典などで言及もされないことが多いので、テキストを読んでいて理解に困ることも起こりうるだろう。

1. 3. 1. 9. 用法の融合

これまで *aller* + inf. 構文の持つ9つの用法 (1. 1. 2., 1. 3. 1. 1. ~ 1. 3. 1. 8) をリストアップしたが、実例を観察するとこの8つの項目のいずれかに分類することが困難なものが少なくない。D&P も次の

(25) ...Tu sais pourtant que vous couriez tous après ce garçon. --Voyons, père, tu ne vas pas le défendre (*Ibid.*: 110)

を引いて、ここで *vas* は近接未来の意味する「以降」の意味と、「異常な行為」の両方の用法に関わるとする。また(22)で挙げた例も、「語りの *aller*」

であると同時に「目的を伴う空間移動」とも解釈できる。

1. 3. 2. 「継続」(+現在分詞)

話し言葉ではごく稀なこの構文は状況の継続を表わす。

- (26) O vous ! Monsieur André Hallays, qui allez répétant que la vie se retire des oeuvres d'art, dès qu'elles ne servent plus aux fins qui présidèrent à leur création... (M. Proust, cité par Damourette et Pichon : 112)

D&Pはこの用法について、継続と、そして継続によってますます重要になるその結果が表現されると述べる。

1. 4. 間投詞

最後に取り上げるのは *aller* の1人称複数 (*allons*)、2人称単数 (*va*) そして2人称複数 (*allez*) での命令形が間投詞として用いられる用法である。典型的には次のように、行為への励まし、激励の意味合いの用法がある³。

- (27) « C'est la seule solution, dit encore l'inspecteur. Allez, suis-nous. » « Au commissariat ? faisait Noël, épouvanté. Ils vont vous mettre en prison. --Ils sont là pour ça ! Allez, mon père Noël, pose ta lime et partons. (P. Véry, *Signé : Alouette*)

2. メタファによる意味派生モデル

1. で見たように *aller* は多くの意味用法のある多義語である。*Aller* の多義の説明としてはメタファが用いられることが多い。典型的な例としてD&Pを見よう。彼らはまず *aller* を移動を表わす動詞と規定し、それに3つの要素を認める。すなわち (A) 動作を起して移動を完遂するという主体の意志、(B) 移動に要する時間、(C) 話し手が基点となるような移動の方向性、の3つである。

移動の意味はこの3要素に支えられているが、次に意味の希薄化が起こるといふ。意味の希薄化とは具体的には3要素のうちの1つだけが焦点に位置し、他の2要素が消えてしまう現象のことである。(A)の主体の意志、移動への志向のみを残すと、「異常な行為」の解釈が得られるという。現実の移動がないために、この志向は何らかの行為への傾倒を示すにとどま

るとされる。この志向、傾倒が期待・想定される状況を乱す原因として捉えられることで異常な行為の意味効果が生まれることになる。

(B)の移動に要する時間を残すと、「継続」の解釈が生まれる。

最後に(C)に挙げられた移動の方向性のみを残すと、まず移動が空間内から時間内での移動に解釈されるが、これはメタファに拠るとされる。話し手が占める時点を時間内での移動の基点として、不定法で示されるできごとを基点よりも「以降」に位置づけることになる。

多くの研究者は近接未来が移動の意味からメタファによって空間内での移動を時間内での移動に投影するという考え方を踏襲する⁴。他方「異常な行為」については、これを近接未来のモーダルな用法であると考え方が Schrott(2001)によって示された。これに対し Larreya(2005)は、「異常な行為」の用法は *aller* のあらゆる法・時制を許容するものであり、近接未来が直説法現在と半過去に限られるという法・時制に関わる制限を持たないことを指摘し、「異常な行為」は移動の意味から直接派生するとした。

Larreya は「異常な行為」の用法で異常だと見なされるのは不定法で表わされるできごとというよりも、むしろそのようなできごとに通じた経路であると主張する。既に行為が行なわれている(23)のような場合のモダリティは、してしばしば苛立ちを伴う不賛成、非難のニュアンスを持つ義務モダリティ *modalité déontique* と、言及する行為が驚くべきものである、つまり実現する可能性が少ない行為であることをいう認識モダリティ *modalité épistémique* であるとされる。従ってこの用法での不定法で表わされるできごとは人またはそれに準ずる行為主体によって意図的に行なわれるものであることがわかる。また(24)のように行為が未然である場合は行為に導く「移動」の動きの前に評価のモダリティがかかるので、行為の適切さ、正当性を問うことになるという。

従って Larreya にとって *aller* の文法的用法のうち不定法を従えるものは、(i) 近接未来およびそれからの派生と、(ii) 移動とそれからの直接の派生である「異常な行為」という2つの派生系列があることになるが、近接未来それ自身も移動からの派生である⁵。

いかなる立場を採ろうとも、メタファによる説明は歴史的契機の再現を目指すものであり、必ずしも現在のフランス語における aller の機能を反映しているとは言えない。また aller の文法的用法以外の用法の中には移動以外のものも多いが、それらに言及されていないことも問題であろう。これらを踏まえて以下では aller の諸用法の統括的な記述の可能性を考えたい。

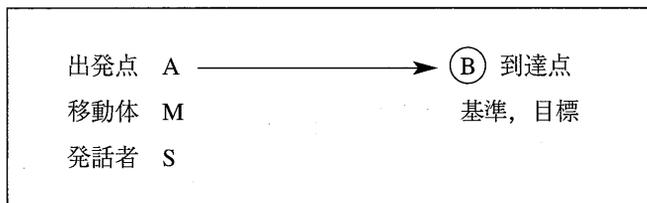
3. 仮説の構築に向けて

以下に提示する仮説は aller の諸用法を大まかに捉えるものであり、細部についてはなお検証を要する。仮説を提示する前にモダリティについて一言述べておきたい。

Ducrot(1993)はモダリティの概念が命題内容とモダリティという二分法(Bally の用語では dictum と modus)に発していること、そしてこの二分法が客観と主観という古来の概念に則っているものの、客観的な存在としての命題内容の同定が非常に困難でその存在が疑われることなどを示そうとした。他方モダリティがあらゆるレベルで介在するために有効な操作概念ではなくなっていることを指摘し、それに代わるものとしてポリフォニー理論を提唱した⁶。ここでこの問題により深く立ち入る余裕はないが、本稿ではこの命題内容とモダリティという二分法を必ずしも否定はしない。ただし命題内容にモダリティがかけられてその結果として言表が得られるとする従来の考え方については後で議論の対象にする。

それでは仮説を組み立てて行こう。まず「空間移動」の意味を次のように表わすことから始めよう。

(28) 主体の配置 M の B への位置づけ (合致)



この図は移動主体 M が出発点 A から目標点 B への移動を記したもので、移動の始まる前には A に M が位置している。また発話者 S は A にいるものとする。「行く」や「来る」の記述で発話者または視点がどこに位置するかなどの問題が議論されたが、ここでは話を単純化して、aller の移動の意味は M と S の A および B に関しての配置の問題であると述べておく。このレベルで既に主観、主体間モダリティが介在することを確認しておこう。空間移動を示す aller は基本的には客観的な移動を記述する語ではなく、むしろ移動を主観的に捉えて記述する語である。

(28)はあくまで aller の移動の意味を図示したものに過ぎず、他の用法に当てはめることは出来ない。そこで(28)をより抽象的に捉えてみよう。空間移動では移動体 M は初めは A にあって B を志向する。M の位置が B に合致するときに移動は完了する。

より一般的に A と B とを地点ではなく状況として考えてみよう。M は出発点で状況 A を持ち、M の到達点の状況 B を志向する。M に与えられた状況 A と志向する対象としての状況 B があり、A が B に合致することが望まれる。これを動詞 aller の基本的なシエマとする。従って aller の基本的シエマは主観的な要素、つまり望ましいまたは想定される状況 B への他の状況 A の合致の志向を含むことになり、モダリティ要素は客観的指示機能の前に指定されることになる。ただし基本的シエマを操作する段階で他のマーカーが示す様々な操作が介入して最終的な解釈を作り出していくことになる。

「目的を伴う空間移動」とは、M が空間移動すると同時に目的が達せられる状況 B が志向される。従ってここで A とは目的を達していない時点での状況ということになる。状況 A が状況 B と合致すれば目的は達せられたことになる。このシエマに空間移動が重なって目的を持つ移動の意味が生じると考えられる。

移動は基本的なシエマにおいて A と B が異なる地点の場合の意味であり、目的を伴う移動では B が目的を達成した状況、A が達成していない時点での状況と捉えることになる。このように基本的シエマの A と B に

どのような内容を与えるかによって様々な意味が得られると考えるわけである。

「価値評価」の用法は主体が望ましい状況として志向する B の構築があり、与えられている状況 A が B に合致していることを表わすものである。B の構築の主体は発話者 *énonciateur* である。(7)は共発話者 *coénonciateur* にとって望ましい状況 B に与えられた状況が合致しているかを問うている文である。

価値評価の用法には次のようなものもある。

(29) *Cette robe lui va bien.*

ここでも彼女にとって望ましい状況、つまりワンピースが良く (似) 合う状況 B が構築されていて、与えられた状況 A がこれに合致していることを *bien* 「良く」がマークする。

次に文法的用法を見て行こう。「近接未来」はある状況 B が発話時の状況においてすでに構築されていてその生起が保証されており、後は現実の時間軸上に生起するのが待たれるだけの状況を表わす。つまり、現実の状況 A が想定された状況 B に発話時より後に合致することを意味するのが近接未来だということになる。

「非現実」と名づけた用法は近接未来で見た B が実は生起しなかったこと、つまり現実の状況 A が想定された状況 B と合致することがなかったことを表わす表現が加わったものに過ぎない。A が B と合致するという想定にも拘らず、邪魔が入って合致に至らなかったわけだが、*aller* は合致の想定をマークするものなので、合致が実現しないことを妨げるものではない。ここでもう一つ重要なことは、A の B との合致が志向されているということ自体は A が B と合致しない可能性を含意するということである。「価値評価」の用法では *mal* がこの非合致をマークしたが、「非現実」ではより語用論的な要素が非合致をマークすることになる。*Aller* は単に A と B の配置のシエマと、A の B への合致への志向をマークするだけで、例えば半過去形によってマークされるアスペクト・モダリティ操作が合致の成立に介入してくるのである。注意すべきことは、B の構築と A の B

への合致への志向という極めてモーダルな操作が根底にあって、それに他の操作が加わることで文の実際の解釈が構築されていくことであろう。命題内容がまずあってモダリティがそれに加わるということではなく、allerの場合にはむしろモーダルなシエマの項に指示対象を当てはめていくことで意味が作られると考えるのである。

「推測」は(17)がその例だが、状況 A (「犬がほえ続けている」)において A を惹起した状況 B (「彼が犬に餌をあげるのを忘れる」) を想定することであり、B は時間軸上は基準時 (ここでは A の時点) より以前に位置することが不定法複合形 (avoir oublié) により示されている。結果状況 A が因果関係のつながりによって原因状況 B と想像の世界で合致すると捉えられる。

「婉曲」では発話者がある発話内容 P を発話するわけだが、まさにその時に on va dire と言って躊躇、戸惑い、遠慮などを表す用法である。A は P を発話する状況であるが、B も同様に P を発話する状況 (on va dire) のことである。つまり、与えられた現実の状況 A についてこれが想定された状況 B と合致することを言うことで、A が志向された B への合致によって始めて実現したことを示し、言表行為が生のままの行為ではなくワンクッション置いて遠慮した行為であることをマークすると考えられるのである。

「命令・依頼」は発話者が望ましく思う状況 B を共発話者に提示することで、B が実現していない現実の状況 A を変えるように指示する用法である。

「特徴的ふるまい」はある行為がその行為主体の既に知られている性質から想定できるような行為の一例であり、かつまたそれが意外な行為であることをも同時に示すという複雑なものである。この意外性は「特徴的ふるまい」の他にも、「異常な行為」と「語りの aller」に共通したものである。Larreya は D&P 以来この用法を細かく考察した数少ない研究の一つだが、できごとの生起の後で行なわれるモーダル操作であると言うだけでこの意外性の説明はない。ただし Bourdin(2003)などへの言及により、aller

が類型論的観点から意外性や迷惑などネガティブなニュアンスを持ちやすいことが述べられている⁷。

A の合致すべき B の構築において意外性の介入を次のように解釈したい。発話者 S と共発話者 S' または他の主体 S_x との乖離に意外性の生成を見るというのが仮説である。S と S' (または S_x) のそれぞれに互いに矛盾しあうような A と B のいずれかを付与することで意外性や迷惑のニュアンスが出ることになる。

「特徴的ふるまい」では生じた状況 A に対して発話者が A を排除するような B₁ を構築しておき、他方 A が想定させる、行為主体に起因するような原因 B₂ を構築すると、A は B₂ から見ると当然予期される行為の実現であり、他方 B₁ から見ると意外なふるまいの実現である。ここで B₁ は発話者による構築であるが、B₂ は因果関係に支えられた推論によって S_x が構築している。(21)を採ると、Bush の行為 A はイラクに民主主義制度を確立すべきだと説明することであり、他方 B₂ は他の一連の Bush のふるまいで A を想定可能とするような、Bush の性格であろう。他方 B₁ は発話者が義務または認知モダリティのレベルで A を排除するような形で構築していることになる。

他方「異常な行為」を見ると例えば(24)では子爵の怒りの原因を仲間がどう考えているのかを問う共発話者 S' に対して発話者 S がそのような探求の無意味さを *aller + inf.* で表現する。つまり S' が引き受ける状況 A (「原因の探求」) に対して S はそれと矛盾する状況 B (「原因探求が不可能」) を構築する。そこで S' の A が否定されるような意味効果が生まれるのである。ただし B はあるできごとの成立を S' に要求する命令文の形を採っており、S はその成立が不可能だと思っていることから A の否定に繋がるという入り組んだ構造を持っている。

それでは「語りの *aller*」はいかにして説明されるのだろうか。これが語りの現在の文脈で現れる過去の出来事について用いられること⁸、そして意外性のニュアンスを持つことが問題となる。語り手・書き手 S は既構築である語るべき B を語りのなかで展開するが、この展開が状況 A であ

る。聞き手・読み手 S' にとっては S にとっては既知の B を新たな情報である A と区別できず、語られるべき内容と語られる内容とが合致することになる。Benveniste が歴史叙述 *histoire* と呼んだ形式はまさに発話主体が介在せず語りが自分自身を展開していくものであり、これが *aller + inf.* では A が B に合致していく過程と捉えられる。これは語りの中のすべての文に当てはまるものだが、*aller + inf.* は特に劇的な状況について用いられるようで、それは B が想定しにくい状況において、それでも A という形で B が述べられることから生まれる効果であろう。

「継続」の用法では、できごとの展開において実現している A に対して同じ内容の B を構築し、それが時間軸に沿って A がつぎつぎと B に合致していくことが継続の意味効果を作り出すと考えたい。

最後に間投詞の用法にも言及しておこう。典型的には「勇気付け」をマークする *allez* や *allons*, *va* だが、これは明らかに望ましい状況 B が構築されていて、間投詞の対象となる人の状況 A を B に合致するよう勧め勇気付けるときに用いられる。

4. 結語

本稿は動詞 *aller* が与えられた状況 A の想定されまたは望まれる状況 B への合致の志向を示すマーカーであるという仮説を述べた。言及できなかった用法に *aller de soi* 「当然である」、*aller sans dire* 「言うまでもない」、*se laisser aller* 「成り行きを妨げない」なども基本的シエマによって説明がつくと思われるが、他にも様々な用法がある。今後の検証を俟ちたい。

注

- 1 本稿は 2006 年 10 月 14 日に京都で行なわれたフランス語談話会での発表に手を加えたものである。有益なコメントをくださったオーガナイザーの春木仁孝氏、および発表者の益岡隆志氏と Christine Lamarre 氏、そして例文を提供してくださった中尾和美氏に謝意を表したい。

- 2 ただしこの例では *aller* が「目的を伴う移動」の意味をも併せ持っているようで、そのために *allai marcher* の形が出てくる可能性もある。用法の混在については 1. 3. 1. 8. 参照。
- 3 これらの形態は *donc* その他の要素と組み合わせられて、より微妙なニュアンスを持つことがある。Sierra Soriano(2006)参照。
- 4 Gougenheim(1929)は近接未来を始動相を示す *aller + inf.* から派生させようとした (cf. p. 97 : *Je le vois querre sans respit Et puis si le vous ameneray Tout au plus tost que je pourray, Miracles de N.-D.* 「直ぐに彼を探しに行つて、あなたのところにできるだけ急いでつれてきましょう」)。また不定法で示される目的を伴う *aller* に近接未来の起源を求める者もいるが、Olbertz(1998 : 233)が指摘するように無理がある。
- 5 語りの *aller* については Squatini(1998 : 189sq.)参照。
- 6 Ducrot(1989)も参照のこと。日本語学では日本語の構造的特性からモダリティを捉えようとする動きが展開されているが、ヨーロッパの伝統との接点が過去に存在したのではないかと思われる。実際モダリティと命題内容の意味的規定はヨーロッパの伝統を引き継いだ形をしていて、従つて Ducrot の提起する問題を引きずっているのではないかと考えられる。
- 7 Cf. Forest(1993). 「行く」の意味の語が多く of 言語でネガティブなニュアンスを持つ用法を持つことは興味深いが、個々の言語での詳細な考察が欠かせない。Dhorne(2005)は日本語の「行く」の考察の中で *aller* が表現する移動の結果の不確定性を参照している。しかしフランス語の *ça va* 「うまく行つている」などが問題になる。想定または期待される状況 B の構築は現実の状況 A とのズレを話題にしやすいくということが考えられる。
- 8 ただし半過去も可能である。C'est ainsi que Conrad Rückert entra dans notre vie. Mon père était ravi parce que le prisonnier était originaire d'une île de la Frise-Orientale, pays d'élevage par excellence, et que son métier, avant la guerre, était de s'occuper du bétail. La célèbre vache frisonne allait d'ailleurs réussir où la Wehrmacht avait échoué. Elle allait conquérir l'Europe. Rückert prétendait que, dans son pays, il s'était spécialisé dans les bêtes à concours. (R. Garnier : *Séparations*)

参考文献

朝倉季雄 (2002), 新フランス文法事典, 白水社。

Bat-Zeev Shyldkrot, H. & N. Le Querler (éds.) (2005), *Les périphrases verbales*, Amster-

- dam, John Benjamins Publ. Co.
- Bourdin, P. (1999), Deixis directionnelle et « acquis cinétique » : de 'venir' à 'arriver', à travers quelques langues, in A. Mettouchi et H. Quentin (éds.), *La référence -2-, Travaux linguistiques du CERLICO* 12.
- Bourdin, P. (2003), On two distinct uses of go as a conjoined marker of evaluative modality, in R. Facchinetti et al.(eds.), *Modality in Contemporary English*, Berlin, Mouton de Gruyter.
- Damourette, J. et E. Pichon (1911-1940), *Des mots à la pensée : essai de grammaire de la langue française*, Tome V, Paris, D'Arthey.
- Dhorne, F. (2005), *Aspect et temps en japonais*, Bibliothèque de Faits de langues, Paris, Editions Ophrys
- Ducrot, O. (1989), *Logique, structure, énonciation*, Paris, Ed. de Minuit.
- Ducrot, O. (1993), A quoi sert le concept de modalité ?, in N. Dittmar et A. Reich (eds.), *Modality in Language Acquisition*, Berlin, Walter de Gruyter.
- Forest, R. (1993), « Aller » et l'empathie, *Bulletin de la Société de Linguistique de Paris* 88 (1).
- Franckel, J.-J. (1984), Futur 'simple' et futur 'proche', *Le français dans le monde* 23.
- Gosselin, L. (1999), Les valeurs de l'imparfait et du conditionnel dans les systèmes hypothétiques, in Vogeleer et al.(éds.).
- Gougenheim, G., (1929), *Etude sur les ériphrases verbales de la langue française*, Paris, Nizet.
- Larrea, P. (2001), Modal Verbs and the Expression of Futurity in English, French and Italian, *Belgian Journal of Linguistics* 14.
- Larrea, P. (2003), Types de modalité et types de modalisation, in M. Birkelund et al. (éds.), *Aspects de la Modalité*, Tübingen, Max Niemeyer Verlag.
- Larrea, P. (2005), Sur les emplois de la périphrase *aller* + infinitif, in Bat-Zeev Shyldkrot & Le Querler (eds.)
- Olbertz, H. (1998), *Verbal Periphrases in a Functional Grammar of Spanish*, Berlin, Mouton de Gruyter.
- Robert, S; (1994), Sur le rôle du sujet énonciateur dans la construction du sens : lien entre temps, aspect et modalité, in Yaguello, M. (ed.), *Subjecthood and Subjectivity. The status of the subject in linguistic theory*, Paris, Ophrys.
- Schrott, A. (2001), La modalisation d'une forme temporelle : le *futur périphrastique* et l'*allure extraordinaire*, in P. Dendale et J : van der Auwera (éds.), *Les verbes modaux, Cahiers Chronos* 8.
- Sierra Soriano, A. (2006), Interjections issues d'un verbe de mouvement : étude comparée français-espagnol, *Langages* 161.

- Squartini, M. (1998), *Verbal Periphrases in Romance. Aspect, Actionality, and Grammaticalization*, Berlin, Mouton de Gruyter.
- Viala, H. (2006), Des mots « total » mode, on va dire, *Le Monde* du 26. 04. 2006.
- Vogeleer, S. et al. (1999), *La modalité sous tous ses aspects*, *Cahiers Chronos* 4.